

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00344

研究課題名(和文) 雑誌『小天地』(金尾文淵堂発行)の基礎的研究 明治期大阪文芸メディアの戦略分析

研究課題名(英文) Fundamental Research on the Magazine "Shoutenchi" (published by Kanao Bunendo):  
A Strategic Analysis of Osaka Literary Media in the Meiji Era

研究代表者

西山 康一 (Nishiyama, Kouichi)

岡山大学・社会文化科学学域・准教授

研究者番号：40448212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 本科研費ではメンバー個々で本研究課題に関わる論文を発表しつつ、メンバー全体では日本近代文学会関西支部秋季大会においてパネル発表を行った。同パネル発表では「雑誌『小天地』の基礎的研究 明治期地方文芸メディアの一ケースとして」という演題のもと、メンバーの庄司が司会を担当し、掛野・竹本・西山がパネラーとして登壇することとなった。

また、そのパネル発表をふまえつつ、本科研費の研究の集大成として『小天地』復刻版を作成し刊行した。特に別冊として解説編を付し、メンバー各自の論稿とともに「『小天地』小説覧掲載作品の梗概」、「『小天地』執筆者索引」等のデータを公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治期大阪の画期的な文芸誌であるにもかかわらず、これまでほとんど研究されずに歴史に埋もれていた『小天地』という雑誌の存在価値を、文学のみならず美術や社会史に関わる多面的なアプローチにより浮かび上がらせたところに、本研究の学術的意義がある。

また、多くが散逸してしまい、全25巻を通読することは困難な状態にあった『小天地』を、収集したデータや論稿を別冊として付しつつ復刻できたのは、学術的のみならず社会的にもたいへん有意義なことであった。今後、日本近代文学研究にとどまらない文化史、ジャーナリズム、美術史の研究など、様々な研究領域での利用が期待される。

研究成果の概要(英文)： In this KAKENHI program, each member presented a paper related to this research topic, and the entire group made a panel presentation at the Autumn Conference of the Kansai Branch of the Society for Modern Japanese Literature. At the same panel presentation, under the title of "Fundamental Research on the Magazine 'Shoutenchi': A Case of Local Literary Media in the Meiji Period-", member Shoji acted as moderator, while Kakeno, Takemoto, and Nishiyama acted as panelists. It was decided to take the stage.

In addition, based on the panel presentation, we created and published a reprint of "Shoutenchi" as a culmination of research funded by this KAKENHI. In particular, a commentary edition was attached as a separate volume, and data such as "Synopsis of the works published in the 'Shoutenchi' novel list" and the "Shoutenchi" author index" were released along with the papers of each member.

研究分野：日本近代文学

キーワード：小天地 薄田泣菫 金尾文淵堂 雑誌 メディア研究 日本近代文学 関西 明治

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題開始の少し前には、『大阪近代文学事典』(和泉書院、2005年)、『北海道文学事典』(勉誠出版、2013年)など日本各地の文学事典が盛んに出版され、またそれ以外にも復刻版『東北文学』(不二出版、2016年)や復刻版『四国春秋』(三人社、2015年)など、埋もれた地方の文芸誌や文化運動に関わる雑誌の復刻版が相次いで行われた。特に関西圏については、地元の和泉書院が上記の『大阪近代文学事典』をはじめとする関西近隣の地方文学事典を、次々と編んでいくのと並行して、日本近代文学会関西支部でも「異なる関西」というテーマのもとに4回のシンポジウムを組んで(2015年度秋季大会～2017年度春季大会)関西圏における独自の近代文学・文化発生の現場の検証を進めていた。その成果は、書籍『異なる関西』(田畑書店、2018年)となって刊行され、まさに地方における近代文学発生の現場が注目されていた。そこには、地方独自の近代文学発生の現場を掘り起こすことで、東京圏を中心とするこれまでの日本近代文学史のストーリーを相対化し、新たなその形を見出そうとする研究者たちの意識も当然あったと思われる。

だが、一方で昭和期大阪で刊行された『女性』・『苦楽』とともに、「大阪刊行誌の冠たるもの」(藤田福夫)と言われた明治期刊の文芸誌『小天地』に関する研究は、未だほとんど行われていなかった。『小天地』は明治33(1900)年10月から明治36年1月まで、当時大阪心斎橋筋にあった金尾文淵堂が刊行した文芸誌である。この雑誌が「大阪刊行誌の冠たるもの」とされる理由は、同時代に大阪で発行された文芸誌と比較してみるとよくわかる。たとえば、『よしあし草』(明治30年創刊、33年に『関西文学』と改題)など、当時大阪で刊行されていた雑誌といえば、ほとんどが地元の若手中心の同人誌的な性格のものであったのと対照的に、『小天地』では高安月郊、菊池幽芳、須藤南翠といった関西圏の作家と、泉鏡花、川上眉山、与謝野鉄幹、坪内逍遙、島村抱月といった東京圏でも活躍中の著名な作家をも賛助会員に据え、さらには国木田独步、島崎藤村、徳田秋声、永井荷風、正宗白鳥といった当代の流行作家たちの寄稿も受けている。その意味で、関西文壇と東京文壇の流れが合流するかのような独特の誌面構成をもつ雑誌として、画期的なものであった。こうした編集がこの時代この大阪の地にどのようにして起こり得たのか、またその編集に携わった薄田泣菫、角田浩々歌客、平尾不孤(途中で松崎天民と交代)、さらにはそれを刊行した金尾文淵堂やこの雑誌に集まった作家たちの戦略はどのようなものだったのか、そして最後にこの雑誌がその後の関西圏あるいは東京圏の文壇やジャーナリズムに、どのような影響をもたらしたのか、そうしたことを明らかにすることで、明治期大阪の、あるいは日本全体のジャーナリズムの今まで知られていなかった一端を明らかにし、これまでの日本近代文学史とは違った角度から、近代日本文学発生の現場を捉えたく考え、本研究課題を検討することとなった。

また、本科研費メンバーのこれまでの研究との関わりからいうと、研究代表者の西山は、それ以前に科研費基盤研究(C)「薄田泣菫文庫の全容解明に向けての総合的研究 明治・大正文壇の思想的水脈として」(2016～2018年度、研究課題番号:16K02407)で研究代表を務めるなど、倉敷市の薄田泣菫文庫の調査・研究に携わってきた。この薄田泣菫文庫調査の科研費メンバーには、本科研費の研究分担者でもある竹本寛秋・掛野剛史も加わっている。また、本研究のもう一人の分担者である庄司達也、あるいは研究協力者の荒井真理亜も、上記科研費のメンバーではないが、倉敷市の立ち上げた薄田泣菫調査研究プロジェクトで、ずっと一緒に薄田泣菫文庫の調査をやってきた。その調査 薄田泣菫文庫に残る沢山の文学者等からの書簡を翻刻・調査する中で、薄田泣菫を中心に編集された『小天地』という大阪の文芸誌の存在を知り、泣菫がその編集の中で関西圏のみならず東京圏の作家たちともやり取りをし、『小天地』への寄稿を求めていたことがわかった。そうしたことから『小天地』という雑誌に関心を持ち、実際に『小天地』を手にとって確認してみて、改めて上記したようなその先進性に驚かされた。しかし、一方で『小天地』に関してさらに調査してみると、ほとんど研究されていないこともわかってきた。そうしたことから本研究課題の着想に至った次第である。

## 2. 研究の目的

前述したように、明治期大阪の画期的な文芸誌であるにもかかわらず、『小天地』の研究はこれまでほとんどなされてこなかった。『小天地』を対象とした研究としては、藤田福夫「文学雑誌『小天地』総目録と金尾文淵堂」(『金沢大学教育学部紀要 人文・社会・教育科学編』1966年12月)、明石利代『関西文壇の形成』(前田書店、1975年)の第四・五章「投書雑誌による文壇形成期(前期)」・「同(後期)」、坪内祐三「金尾文淵堂の雑誌『小天地』(探訪記者松崎天民-8)」(『ちくま』1996年11月)、石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』(新宿書房、2005年)の第一章「『ふた葉』から『小天地』へ」があげられるが、それくらいである。むしろ、『近代文学雑誌事典』(至文堂、1966年)などでは、同名の石川啄木編集の別雑誌『小天地』と混同されてい

たりして、そのこと自体が研究されて来なかったことを証明しているといえよう。そうした歴史に埋もれた、しかし価値のある対象を取り上げ、その存在意義を明らかにするということに、まずは本研究の目的がある。たとえば、国木田独歩が東京文壇で認められない時期に、彼の「牛肉と馬鈴薯」(明治34年11月)や「非凡人」(明治35年6月)を『小天地』が掲載していることは、もう少し評価されてよいことだろう。『小天地』を見ていけば、このように個人の作家研究に資するような、今まであまり注目されていなかった事実がまだまだあるだろうし、新たな作家像さらには文学史像を見出すこともできるのではないかと考える。

また、本研究が取り上げる『小天地』は、前述したように東西の作家が集う執筆陣の充実だけでなく、そのジャンルも文学のみならず社会・芸術全般と多様である。文学は小説のみならず韻文作品も、編集者薄田泣菫の代表作「公孫樹下にたちて」をはじめとして充実しており、その他馬場孤蝶や正宗白鳥らによる外国文学の紹介、さらに新聞関係者が執筆陣に加わることで社会・娯楽的な面にも力を入れている。また、口絵・挿絵あるいは附録の絵八ガキには、下村為山、赤松麟作、満谷国四郎など著名な美術家が腕を振っている。こうした多面性を持つ『小天地』という雑誌を検討することで、その成果は個人作家研究に留まらず日本近代文学研究全体、さらには美術・風俗・出版・ジャーナリズム・社会史といった多分野において意義のある、学際的な研究成果をあげることを目的とする。

さらに前述したように、地方の文芸誌研究という観点から見れば、近年各地方の文学事典の出版も盛んに行なわれ、また埋もれた地方の文芸誌や文化運動にかかわる雑誌の復刻版も相次いで刊行され、まさに地方における近代文学発生の現場が問い直されつつあった。本研究も、こうした学術的な流れの中で着想を得た同時に、おそらくこれらの学術的な流れをさらに進める

大阪のみならず全国の地方近代文学発生の研究にも、何らかの形で資する研究になることだろうという目的意識もあった。

### 3. 研究の方法

本研究は、次の3段階を踏んで行われた。

#### 『小天地』の書誌的情報の収集・データベース作成

本研究では『小天地』の全体像を浮かび上がらせるため、まずはその書誌的情報を収集する必要があった。既に『小天地』の総目次・解説としては、藤田福夫「文学雑誌「小天地」総目録と金尾文淵堂」(前掲)があったが、しかしその総目次は「主だった作品について作成した」とそこに記載されているように、完全なものとは言いがたい。そのため、本科研費の前半期では『小天地』を所蔵する全国の図書館・文学館を調査・訪問し、各館の『小天地』各号を比較しながら最も善本と思われるものを探し出した上で、各号に掲載された広告や付録も含めた『小天地』の完全な書誌的情報を収集し総目次をまとめていった。そして、それをデータベース化して本科研費の後半期の研究活動＝『小天地』の具体的な内容分析に繋げることを、まずは研究活動の一つの柱として作業を進めた。

#### 『小天地』という雑誌の多角的分析・検討

本科研費の2年目以降の研究課題として、上記のデータベースを活用しつつ『小天地』という雑誌を横断的に見ていくことで、その内容的特徴を明らかにすることを目指した。もちろん、前述したように『小天地』という雑誌は多面的な側面を持つため、一つの特徴にまとめることは不可能であり、研究する側も様々な角度から分析・検討していく必要がある。そのため、研究代表者・分担者が、各自の興味関心(あるいは得意な分野)に基づいて分担しながら、分析・検討を加えていくことにした。具体的には、まず代表者の西山は勤務先が岡山ということで、『小天地』の編集人の中でも特に岡山県出身の薄田泣菫と松崎天民の関係性を探り、そこから『小天地』編集の方針がどういったもので、どのようにして記事が制作され、また後代にどこまで影響を及ぼしているのか、といったことを検討していくこととなった。分担者については、やはりこれまでやってきた研究領域・手法に基づき、掛野剛史は同時代のジャーナリズムとの関連や比較を、竹本寛秋は韻文関係を、それぞれ分析・検討していった。また、庄司達也は『小天地』の小説作品を、独自に実見したそれらの入稿原稿等を利用して、作品の生成過程を明らかにした。

その他、前述したように『小天地』はその表紙や口絵・挿絵などが特徴的であるが、その点に関しては特に相愛大学の荒井真理亜氏に研究協力者になってもらい、分析・検討してもらうことにした。荒井氏はこれまでに大阪の雑誌や、文学作品と挿絵の関係に関して研究をしてきたこともあり、美術史・装幀史研究立場から『小天地』を分析・検討してもらうのにまさに適役であった。このように分担して、『小天地』を多角的に分析・検討することで、その全体像を浮かび上がらせることとした。

#### 研究成果の公開

それらの研究成果を、上記のメンバーが個々に論文化して発表するのと同時に、本科研費補助期間の3年目にはメンバーそれぞれの研究成果を、日本近代文学会関西支部秋季大会のパネル発表(2021年11月14日、オンライン)の場で発表した。そして、さらにそれを踏まえつつ、

研究の総括として本科研費3・4年目に『小天地 復刻版』(琥珀書房、2022年1月・11月)を作成し刊行することで、研究成果の公開に努めた。

#### 4. 研究成果

前述したように、本科研費ではメンバー個々に本研究課題に関わる論文を発表しつつ、メンバー全体で日本近代文学会関西支部秋季大会にてパネル発表を行った。同パネル発表では「雑誌『小天地』の基礎的研究 明治期地方文芸メディアのケースとして」という演題のもと、メンバーの庄司が司会を担当し、掛野・竹本・西山がパネラーとして登壇することとなった。

そして、そのパネル発表をふまえて、本研究の集大成として『小天地』復刻版を作成・刊行した。そもそも『小天地』という雑誌は、その存在は知られていたが、明治期の雑誌でもあり、またその価値を正当に評価されてこなかったこともあって、多くが散逸してしまい閲覧しづらい部類のものであった。特に、全25巻を所蔵する機関は少なく、通読することは困難な状態であった。そのため、今回この科研費チームと琥珀書房が協力し、収集した『小天地』の書誌情報や所蔵リスト等のデータベースを利用して『小天地』復刻版を刊行できたのは、学術的にもたいへん有意義なことであった。今後、日本近代文学研究にとどまらない文化史、ジャーナリズム、美術史の研究など、様々な研究分野での利用が期待される。

さらに、その復刻版の別冊として解説編を付して、そこでメンバー個々のこれまでの研究成果を公開することとした。以下、解説編におけるそれぞれの論稿内容の要約をあげる。

○掛野剛史「『小天地』と編集者薄田泣菫 『新小説』『文芸倶楽部』との比較から」では、『小天地』刊行期の東京の主だった文芸誌として『新小説』と『文芸倶楽部』を取り上げ比較し、特に『小天地』と『新小説』の記事や執筆者の重なりから後藤宙外と薄田泣菫の関係性を指摘しつつ、反面『小天地』独自の動きとして、明治三五(1902)年あたりから「社会」欄を一つの柱として打ち出すようになっていったことも浮かび上がらせる。

○西山康一「『小天地』がジャーナリズムに齎したもの 松崎天民の掲載記事を視座として」では、その『小天地』「社会」欄について、同欄で活躍した松崎天民の記事を中心にその特徴を分析し、大阪ほか関西の都市またそこで活動する人々を立体化し、その裏側を覗き見する読者の欲望を喚起する『小天地』の地方文芸メディアとしての戦略を明らかにし、その後の近代日本ジャーナリズムへの影響を検証する。

○竹本寛秋「雑誌『小天地』と韻文へのまなざし」では、『小天地』の韻文記事をめぐる特徴として、「詩の言文一致」への関心、「劇詩」への注目、投稿論における多様なジャンルの模索という3点をあげ、そこに『小天地』に一貫して見られる態度 「詩」の枠組みの捉え直し・拡張を模索する特徴を見出し、この後の時代の「詩」のジャンルの再編成をめぐる試行錯誤の一資料として『小天地』の存在価値を明らかにする。

○荒井真理亜「『小天地』の美術」では、表紙や口絵、挿絵といった『小天地』の美術関連についての分析を試みる。『明星』などの同時代雑誌の美術に刺激を受けながらも、若い洋画家たちが日本的な画材を様々な手法で意匠化するなど、履歴や画風を異にする様々な画家たちがそれぞれの個性を発揮し挑戦する場として『小天地』があり、そこにこの雑誌の視覚表象における歴史的意義を見出している。

○庄司達也「『小天地』入稿原稿/零葉七種の紹介」では、『小天地』に掲載された7作品(小杉天外「花ごころ」、川上眉山「小町紅」、小栗風葉「ねがひの糸」、中村春雨「獅子檻」、菊池幽芳「弱き女」、広津柳浪「顔の疵」、後藤宙外「雪の湖畔」)について、稿者(庄司)が実見できたその入稿原稿七葉から、ルビが作者自身によるのかどうかを分析。特に、広津柳浪「顔の疵」については、神奈川近代文学館にあるその草稿「股の肉」を参照し、その生成過程を検証する。

以上、これらの論稿のほかに「『小天地』解題」、「『小天地』小説覧掲載作品の梗概」、「『小天地』総目次」、「『小天地』執筆者索引」といったコーナーを付し、今後の研究に資するデータを示した。こうした論稿・データを並べる解説編と、『小天地』本文を蘇らせた『小天地 復刻版』という研究成果は、間違いなく明治期日本文学を考える上で看過できないものであり、また文学以外の文化史、ジャーナリズム史等の研究にも資するものになったと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西山康一	4. 巻 193
2. 論文標題 薄田泣董と倉敷連島	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 総社文学	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西山康一	4. 巻 102
2. 論文標題 文学場における編集者の位置 薄田泣董文庫の調査に携わってメディア論と 資料 の接点を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19018/nihonkindaibungaku.102.0_101	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 掛野剛史	4. 巻 20
2. 論文標題 研究ノート 金尾文淵堂発行『小天地』総目次	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 埼玉学園大学紀要 人間学部篇	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 庄司達也	4. 巻 136
2. 論文標題 二字の伏せ字 戦時下での或る編集者の仕事	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学言語と文芸	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 庄司達也	4. 巻 55
2. 論文標題 芥川龍之介と大阪毎日新聞社 一九二四年一月「誠職事件」考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 湘南文学	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 掛野剛史・竹本寛秋・西山康一 (パネル発表)
2. 発表標題 雑誌『小天地』の基礎的研究 明治期地方文芸メディアの一ケースとして
3. 学会等名 日本近代文学会関西支部 秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 庄司達也
2. 発表標題 「大阪毎日新聞社と菊池寛」補説
3. 学会等名 国文学言語と文芸の会 3月例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西山康一、掛野剛史、竹本寛秋、荒井真理亜、庄司達也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 琥珀書房	5. 総ページ数 2500
3. 書名 小天地 復刻版 第2回配本 (解説編付き)	

1. 著者名 薄田泣菫ほか編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 琥珀書房	5. 総ページ数 3000
3. 書名 小天地 復刻版 第1回配本	

1. 著者名 浅子逸男・宮崎真素美・庄司達也（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三人社	5. 総ページ数 700
3. 書名 青い馬 復刻版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	庄司 達也  (Shouji Tatsuya)  (60275998)	横浜市立大学・国際教養学部(教養学系)・教授   (22701)	
研究分担者	竹本 寛秋  (Takemoto Hiroaki)  (20552144)	鹿児島県立短期大学・その他部局等【文学科】・准教授   (47701)	
研究分担者	掛野 剛史  (Kakeno Takeshi)  (00453465)	武蔵野大学・文学部・教授   (32680)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	荒井 真理亜  (Arai Mria)	相愛大学・人文学部・教授    (34421)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関